令和５年　日本女子大学教育学科の会臨時総会　議事録

議題　「教育学科の会解散審議」

１．日時：令和５年 10 月７日（土）午後０時 30 分～午後３時

２．形式：会場参加及び Zoom オンライン参加

３．場所：日本女子大学 120 年館　12001 教室

４．出席会員数（委任状提出数含む）　　463 名（うち委任状出席数 415 名）

５．議長：日本女子大学教育学科の会・会長　田部 俊充（教育学科教授）

司会：同・理事　　藤田 武志（教育学科教授）

６．出席役員

副会長　櫻井 慶子（29 回生）

理事　　松尾 理羽子（31 回生）

理事　　清永 奈穂（院博　2022 年卒）

理事　　中川 純子（38 回生）

監事　　杉山 京子（ 27 回生・オンライン出席）

（委任状出席）※学会、先約イベント等のやむを得ない事情による。

理事　　桑嶋 晋平（教育学科准教授）

理事　　石井 美奈子（38 回生）

理事　　天野 正子（36 回生）

監事　　吉賀 眞理子（30 回生）

７．その他出席者

・教育学科より　清水 睦美教授(教育学科長)　齋藤 慶子教授（前理事）

他７名（会場オンライン整備担当の先生方を含む）

・卒業生会員　浦野 敬子（前副会長）　荻野 美穂子（理事会ボランティア）　他５名

・オンライン出席者　田中 雅文名誉教授（前教育学科長・元教育学科の会会長）

大森 桃子（前副会長）　他卒業生会員　23 名

議題：「教育学科の会解散審議」

◇ **決定事項**

・2024 年 3 月 31 日をもって日本女子大学教育学科の会は解散

・学科からの案内→2024 年 3 月 23 日（土）解散レセプション開催

◇ **審議内容**

（以下、先生方は姓＋ＰかＨＰ　現・前・元理事は姓のみで敬称略　卒業生会員は卒Ａ、卒Ｂ…のように表記）

１．開会の辞（藤田Ｐ）

教育学科の会臨時総会を開催する。式次第に沿って進行していく。

２．会長挨拶（田部Ｐ）

・卒業生理事からの解散提案内容を理事会及び学科内で検討した結果、「状況が更に悪化する前に解散を」という苦渋の選択を了承し、本臨時総会で審議を行うこととなった。

・思い返せば、卒業生に対して学科からのお願いを今までさまざま重ねてきた。多大なご協力をいただいて来たにも拘らず、理事の定員割れによる負担増や後継問題などに思いを巡らすことができなかった。この場をお借りして感謝とお詫びを申し上げたい。

・本日の臨時総会が、学科と卒業生との新たな絆につながることを祈念する。

３．総会成立報告（議長・田部Ｐ）

教育学科の会会則第 10 条に基づき、本臨時総会を開催する。

４．議事「教育学科の会解散審議」

議長・田部Ｐ）

・卒業生理事・副会長の櫻井慶子へ、提案書の説明を要請。

櫻井）

・出席への感謝と共に、伝統ある会の解散を提案する事態になったことをお詫びする。

・今回の提案は卒業生理事の総意である。（メンバーを紹介）

・昨年理事会入りした。その直後に本会に激震が走る事態が発生。その収拾と本会改革を牽引する立場だったことで今年度の副会長に就任した。だが理事２年目のため、それ以前の活動については理事歴 13 年で現監事の杉山京子が述べる。

・以下が、解散審議を提案するに至った理由である。

理事会運営と後継問題

① 今年度の学生委員が決まらず、回生委員もそれ以前からなり手がなく、本理事会を構成する３つの委員会（回生委員会、学生委員会、教員による研究室委員会）のうち、２つが機能停止状態にある。

② 本来は実務を担う卒業生理事のサポート組織であり、次期理事の選出母体でもある回生委員会が、理事や元理事以外の出席がなく機能しなくなってから理事の定員割れが続いていた。後継者もいない中、各業務は担当理事がほぼ一人で行ってきた。現理事達は仕事・家庭・自身の健康問題といった様々な背景を抱えつつ、責任感のみでこのボランティアを長年続けて来た。だが、限界に近付きつつある。

③ 昨年からの業務の徹底見直しと一部の世代交代で、今年度は WEB セミナーの実施、名簿管理クラウドシステムの整備、メルマガ発行といった当初の改革目標の相当部分が達成できた。だが、一般会員の関心を引くには至らず、後継問題好転の糸口は見いだせていない。

名簿問題と会費問題

〈発端となった出来事〉

・昨年５月、卒業生理事達は、当時の学科の会の関係者の先生と学生委員の一部から、学生会費の徴収方法や使途、入会手続きや名簿管理の外部業者委託に対して、ある日突然メールによる厳しい批判を受けた。

・批判の多くはその先生の誤解や学科が行ってきた事務手続き上の慣習で、卒業生理事達がタッチしていないことも多かった。しかも先生ご自身が理事会招集権を持ち、事実関係の確認や制度の改正に向けた審議を自ら率先して行える立場にいた。だがそうした正当な手続きを一切踏まずに突然始まった一方的な批判メールの嵐に、体調を崩す者も現れ、業務もストップした。

・その先生のメールの中には「学生の間で学科の会に対する怨嗟の声が高まっている」「ヤクザまがいの詐欺集団等と言われている」との文言もあり、学科や学生のお役に立ちたいとの思いでボランティアを続けて来た理事達の精神的なダメージは大きかった。

〈制度の見直し〉

・だが批判の中には、時代や実情と合わなくなっても慣習としてそのまま行われて来たことで起こった不都合への指摘もあった。そこで実務担当理事達による業務の見直しと改革が始まり、当時の学科長主導による、学科、卒業生理事、法律専門家も加わっての会則改正ワーキンググループも発足した。詳しくは杉山が後述する。

・その一環として学科は、個人情報法の厳格化と任意団体の加入に際しての任意性の明確化を推進させた。それによって「入学と同時に入会して学生会員となる」「卒業と同時に翌年の会費を払って正会員に移行する」という従来の形式が継続困難になった。

・その結果、必然的に本会は新卒者名簿の入手ができなくなり、会費収入も激減することとなった。

〈会費の現状と今後の財政見通し〉

・従来の会費納入者層と今回の委任状ハガキの返送者層は重複する部分が多く、50 代後半から 80 代半ばまでに集中。更に会報誌「葦」の紙面送付を望んでいる層とも重なる。

・よって「葦」81 号に書いた経費節減のための「葦」のデジタル化移行は、高齢層会員切り捨てのようで心情的に忍びないだけでなく、会費納入層の最大部分を失うリスクがある。

・また紙や印刷代の急騰で今後の「葦」の発行は相当な経費増が予想され、どちらにしても来年度になると財政難に拍車がかかるのは必須。

総括

・以上のような状況から、現体制のままでの活動は、財政面、運営面、そして心理面においても限界に近づきつつあるのは明白である。

・財政的に破綻してからの解散では、4 年分前納の学生会費の返還等が困難になる可能性もある。学生のためにも本理事会の信頼回復のためにも、それだけは避けたい。

・現在の理事会は適材適所のベストメンバー。跡を濁さないきれいな解散が、今なら可能である。

・そこで、学生、学科、卒業生の今後の良好な関係性のためにも、もはや立ち行かなくなっている今の体制をリセットすることを学科に提案した。

・学科での検討の結果、「ホームカミングデーに臨時総会を開いたらどうか」とのご提案があり、本日のような学科を挙げてのご尽力となった。深く感謝している。更に学科は、もし解散となっても、何らかの形での卒業生とのつながり=「学縁」を継続していくおつもりとも伺っている。それが未来につながる新たな絆となることを祈念している。

杉山）

・副会長の櫻井の説明どおり、今回の解散提案は卒業生理事一同の総意である。

〈令和 1 年度の改革〉

・令和 1 年度に、名簿管理システム、会報誌「葦」の印刷発送業者の変更、そして会費振込みシステムを大きく変えた。特に会費振込みをコンビニ収納にしたことによって、過去には 350 人を下回ることがあった会費納入者が 500 人を超えた。

・この改革によって、名簿管理の安全性と担当者の業務負担は大幅に軽減した。以前のままでは名簿や会計情報を後任に引き継ぐのは困難で、会の先行きが心配だった。

・新しいクラウドシステム（ＣＲＭ）の採用は、将来的には「葦」をメルマガ配信やＨＰ閲覧に移行して、発行発送料削減を視野に入れての決断だった。

・だが当時はＣＲＭを使いこなせる人材が殆どいなかったことと、この年からコロナ禍が始まり理事会開催も思うに任せず、デジタル化の推進はそこでストップしてしまった。

〈メール問題とその後の改革〉

・コロナ禍で十分な理事会活動ができず、大学での行事も開催できない時に、前出の先生から卒業生理事及び本会を強く批判するメールが次々に送られて来た。理事達にはあまりにも辛いこのメールによって、理事会は混乱し、思うような活動ができなくなった。

・だが、名誉を回復したい、なんとか会を存続したいという強い思いで、会計分科会とデジタル分科会を立ち上げて、数十回もの会議を開いて改革に奮闘してきた。

・「葦」のデザインや内容を一新し、会則改正ワーキンググループ（以下ＷＧ）では、学科長、会長、先生方、卒業生理事に、法律専門家も加わって、様々な会則についての話し合いが重ねられた。

・特に学生会費については、入会を任意として会費を半額に改正するＷＧの答申書が出され、今年５月の総会で承認もされた。だが、その後学科会での意見の統一がなされないということで、新入生への入会説明も会費の徴収も決まらないまま後期に入ってしまったことは、ＷＧの答申書や総会決定を無にされたようでショックだった。

・しかし収入が減り、後任がいない状況では組織は運営できない。大変残念だが、今年限りの解散を決意した。

田部Ｐ）

詳細なご説明に感謝する。他の方に補足意見がなければ、質疑応答に移る。

質疑応答

卒Ａ　法律家を入れて審議したとはどういうことか？

櫻井　会則改正をするにあたって、今の時代と法令に合った会則にするために、卒業生理事のご子息の弁護士さんにボランティアでＷＧに入っていただき、アドバイスを受けた。

卒Ａ　学科の中で意見が統一されていなかったと先ほどの説明にあったが、何に対してどういう話し合いをして、どう統一しようとしたのかもう少し説明してほしい。

清水Ｐ　今年度より学科長をしている清水です。昨年度まで一教員として教育学科に所属していましたので、経緯に関しては、学科会議で提案される範囲で知っておりました。ただし、今年度の学科運営において、すべての経緯を引き受けて、教育学科の会のことを中心に据えられたのかと聞かれれば、そうではなかったと言わざるをえない。と申しますのも、今年度は学科の中で５名の教員が変わり、その引き継ぎなども多くあり、限られた時間の中で学科の会のこともやらなければいけなかった。また、学科の会に対して強い不信感を持っている先生からの発言により、議論が膠着して進まないということもあり、そのために、学科会議とは別枠の会議場を設けて、この問題に取り組んだりもしたが、そこには限界があったと感じている。その点は卒業生理事には大変申し訳ないと思っているが、学科運営の根幹は在学生の教育であり、その向こうには保護者の評判というものもあり、それに主軸をおくと、教育学科の会に対する学科教員の意見の違いのすり合わせにたくさんの時間を割くことができなかった。学科運営に対する批判はその点を考慮していただきたくお願いする次第です。

加えて、卒業生理事の方々に伝わっていない情報として、日本女子大学は今、少子化の中で女子大としての存続をかけて学部学科の再編を行っている。教育学科も目白への移転前くらいから、「学科を取り潰すかもしれない」というプレッシャーをかけられ、それに対して、教職の免許を出している学科としての意義や教育学科という学科の特色を、理事会や執行部に対して打ち出すことも求められてきており、そうしたなかで、教育学科の会との連携をどのように進めるかという学科内での話し合いを持つことの優先順位が低くなってしまったということも事実である。ここ最近の連携の不足については、このような経緯があったことをご理解いただければありがたい。なお、現在、教育学科のお取り潰しの話は 99％消え、魅力ある学科として受験生に打ち出していく段階である。

本件に関わり、現在の学科長としてお話できる経緯は、ここまでが精一杯である。

卒Ａ　女子大そのものの存続という話がある中で、お話ししにくいことまでよくお話し下さったと思う。教育学科がそんなことになっている中では、いたしかたないのかなと思う。どちらが大きいとか小さいとかではないが、そうなった流れ的なものは得心した。

齋藤Ｐ　着任した 2015 年度から 2018 年度までと、昨年は臨時で理事をさせていただいた。同窓会組織はよくあっても、学生を含めた組織というのはよくあることではないので

非常に意味があると思っている。70 年の歴史があることも、教育史を専門としている自分の研究から考えて貴重な存在だと今も思っている。今回の解散は致し方ないとはいえ、とても残念に思う。

今、学生会費について意見が統一していない点についてのご質問があったが、去年、会費を使って学生にどういうサービスを提供するのか、学生はどういうサービスを受けたいのかということで、様々な企画に携わった。会費を払った権利ばかりを主張している学生の中で、非常に苦しい立場に追い込まれた。だがそれでも会費を払ったら、そこには権利だけでなく責任も義務も生じると、教員として学生にきちんと伝えきれなかったということに対しては、大変申し訳なく思っているし、本当に残念だ。もし寄付をというのなら、学科に寄付をしてくださる卒業生の方々のお気持ちを、きちんと伺っておきたいと思っている。

もし、今回解散が決定されて会費が戻される、あるいは戻した上で残りを学科に寄付しますとなった時に、学科としてどういう思いでそのお金を受け継ぐのか、どう処理するのかを、学科の会の卒業生理事達の思いを含めて審議してほしいと私自身は思う。

またこれは手続き的なことだが、本来ご寄付は学科に直接というのではなく、大学を経由する形をとるものである。そうしたことも、去年会費の徴収の仕方や名簿に対して大学のルールに則ったきちんとした形にしていかなくてはならないと考えている。

浦野　去年まで長らく副会長をさせていただいた。皆さまが色々なご意見をハガキで寄せてくださる。92 歳の方がいつも葦を読んで感想をくださる。そういう方にメールで読んでくださいと言ってもそれは無理。やはり紙の媒体は必要だと思う。でも昨年、デジタル化を進めようという流れで学生さんの葦を配信するようになり、配送費が少し軽くなった。会費のコンビニ収納でも会費納入者が 150 人も増えたのも驚異的だった。それが去年の…みんな抽象的にしか言えないが、詐欺だとかのメールが来てしまった。私たちってなんなのだ。夜まで会議してそんな風に言われるのってなんなのだと思って。それが清水先生のおっしゃったように、学生さんから親御さんまで行ってしまって、教育学科の会って詐欺だとか言われて。そういうふうに言われるのは非常に残念。去年の葦に「改革する」と書いて頑張ったが、卒業生は 8 人しか会費を納入してくれた人がいなかった。今年の新入生はゼロ。若い人に向けてセミナーをやっても入ってこない。そういうところは凄く苦しい。それから人間研究を出しているのは凄いこと。片桐先生のご本が出た。人間研究にずっと書いてくださっていたからだ。あんなふうに色んな先生が人間研究に出して、また

本が出たら素晴らしいと思う。やはり人間研究は、71 年前の先生方が助手の人と一緒に立ち上げて、卒業生にも声をかけてくださったことが素晴らしいと思う。学生、教員、卒業生、三者一体になっていることは素晴らしいことだと思っている。

それが今後難しいのなら、縦の会だけでもなんとかならないかと。外部委託してもなんとかならないかと。卒業生がやっていたので安かった。それを外務委託すると高くなる。それを考えるとどうしたらよいのかと思う。でもせっかく 70 年も続けて来たものを終わりにしちゃうのはもったいない。それが正直な気持ちだ。感情論かもしれないが。

卒Ｂ　このお話をお手紙で拝見した時に反対と思った一人だ。使途不明のグレーゾーンであるとのメールが来ても、正しいことをしているのだから別に怯むことはない。グレーゾーンにならないということを、大学から出してもらえばよい。使途不明金であれば、会計ソフトもあるので簡単に皆さんに提示できるものもある。2017 年に私が高校の先生を囲む会をしたときに、今私は 61 歳だが、60 歳以上の人もいたので、お手紙、メール、LINE と媒体をそれぞれ選べるようにしたら問題なかった。教育学科の会もそういう方法があるのではと思った。そして教育学科の会が、もう少しＣＭ的にマーケティング的に魅力的な内容だったら、学生さんも卒業生も入るのではないか。20 代の頃は私も忙しくてお手紙が来ても読めなかったけれど、50 代になって子どもの手が離れてくると読んだりする時間ができた。沢山の方が関わっていて、ボランティアでやっているということを知ったのも 50 代だった。一般的な会員はそんな生活を送っていると思う。今、60 代になってお手伝いしたいなと思った。なんとか継続したいと今思っている。70 年脈々と続いてきた。これをなくしたくない。今はちょうど媒体が過渡期で分かれる時期。これが 50 年、100 年先となるとメールが普通、LINE が普通という風に変わっていく。この 70 年は大事にして、30 年、50 年というのを細々と守っていきたいと思った。なので、どうか細々と改革をして、方法も変えて、続けて行っていただけたら嬉しいと思ったので発言した。

杉山　ご意見ありがとうございました。冒頭で誹謗中傷するようなメールがあってもしっかりすればよいのではないかと言われたが、私たちもそれはとても許せるものではないので、外部の法律専門家の意見も聞いて行動を起こした。ところが一度広がった噂と、私たちの声が直接学生に伝わらなかったこと、これは大きかった。結局、去年入会していただいたのは８名だった。パンフレットを作り、卒業生に渡した。だが、印象を変えることはできなかった。この件について、何回も何回も会議をして対処はした。それは理解していただきたい。

卒Ｂ　そのメールを書いた個人は特定できているのか？

杉山　できているがこういう公の場で言えないので、難しい判断を強いられている。私の先ほどの文章もオブラートに包む形で書いていた。だから分かりにくかったと思うが、さっき言ったようにひどい言葉をかけられた。だから私たちは対処したということだ。

齋藤Ｐ　先ほど浦野さんから、たとえば卒業生だけの縦の会の話があった。そうした方向性について模索されたとは思うが、そこをどう考えて審議の内容の提案になったのかについて、もしお聞かせいただければ伺いたい。

卒Ａ　教育学科の会は、教員、卒業生、学生、それが一体となっているのが特殊で素晴らしいが、今のお話しを伺って、卒業生だけの縦の会もあるかと。私も若ければお手伝いしますと言いたい。昔は葦もみんなで切手を貼ってやっていた。今から 30 年前で、送る人数が少ないのでできた。だから本当に卒業生だけで何かできれば良いなと思う。文化部がやってくださった素晴らしい講演会をいくつも聞いたが、そういうのは無理でも、成瀬先生のお家をたずねるとか、ちょっと元気になるような、そんなことをやっていただければいいなと思う。ただ実際、お手伝いには加われないので、いいとこ取りかもしれないが。

齋藤Ｐ　パワーポイントに出してもらったハガキ返送者数の表を見ると、46 歳から 57 歳のゾーンから増えていく。私は今まさにこのゾーンに入る。昨日たまたま私の出身大学の同窓会の会館に行って仕事をしてきたが、そういうものの大切さはやっぱりある程度年齢を重ねてから気づいていくのだと思う。新卒の方の関心が薄いのはある意味仕方がないことかなと。名簿を独自に持たなくても、会報を送る時には桜楓会から学科がシールを買って送るということもできる。継続させるための何らかの手段があると思う。それでもやっぱりボランティアの手が必要なので、そのあたりも含めてどういうふうに考えられたのか伺いたい。

櫻井　当然私どもも縦の会として残すということは検討した。だが、それを阻んだのが会費納入者の最多年齢層が、郵送でしか情報を受け取ってもらえない層と重なるからだった。会費収入が減って行く中で郵送費や印刷費の負担は極めて重い。そこで前回の葦で、葦のデジタル配信への順次移行と、セミナーなどの情報のメルマガ配信を打ち出して、メールアドレスの登録を皆さんにお願いした。現在、既存登録者 400 名ほどを含めて 600 名ほどのアドレスをいただいているが、新規に登録して下さったのは比較的若い層で、会費納入者への働きかけには依然、相当の印刷費と郵送費が必要だと改めて認識する結果になった。

そうなると、経費を削るにはどうするかということになる。桜楓会の宛名シールをもらうというのは、費用がかかる今の名簿を手放すということだと思うが、現在のような大手の業者さんに頼むと印刷数が今より減ってもその分単価が高くなるし、宛名シールを送って貼ってもらうのも手作業になるので人件費がとても高くついて、効果的な経費削減にならない。だとすると、たとえばインターネットなどで入手したフォーマットに記事を割り付けて自分達で葦を作り、それを安い印刷屋さんに頼んで印刷配送してもらう方法がある。けれども、そうした見知らぬ格安業者に宛名シールを委託するリスクも考えなくてはいけない。しかも葦の送付は単に会報誌を送るだけでなく、納付書が入った会費の請求書でもある。それも印刷し、近況報告のハガキも印刷し、封筒も印刷すると、以前計算してみたら格安業者を使っても結構なコストになった。その上発送作業は自分達の手作業でとなると、それも大変だ。前回の人間研究は、葦に同封して業者から希望者に送るという従来の方法が取れなかったので、宛名ラベルを自分でＣＲＭから作って封筒に貼って、夫に手伝ってもらって郵便局に運んで発送した。正直とても大変だった。葦の発送となると、数が多いのでそれよりもっと大変なことになるだろう。他にも、学科とのつながりが切れたあとにどういうふうに学科から情報をもらって葦を作るのかも問題だ。また今のＣＲＭは単に名簿ではなく、会費の振込み情報の記録やホームページとも連動している。そこも全部昔の手作業に戻すのかという話になる。ちなみに今回の臨時総会のお知らせは最重要通知なので、葦のメール送付に応じてくれた方も含めて 3400 人ほどに郵便で送った。その費用は郵送代が 20 万円強。通知書、返信ハガキ、封筒の印刷と封入費で 50 万円ほど。合計 70 万円強かかっている。それについても、もっと安い業者があるだろうとの批判もあると思う。だが、現在葦の発行発送を頼んでいる業者にしたのは、秘密保持契約を結んでいて当会のＣＲＭから業者のＣＲＭに会員情報をクラウドの外に出すことなく直接送って印刷してもらえるからだ。セキュリティの考え方も方法も昔とは全く違っているし、名簿ひとつ取ってもそうして色々な部分とつながっているので、なかなか単純に「こう変えれば良い」という訳には行かない。

またボランティアについても、前回の葦で当会の危機を訴えてボランティアの募集を行った。それでも応募者は数人で、実際に手伝ってくださったのはもっと僅かだった。それが、こんなに大変な作業をするとなれば、なり手は更にいないだろう。また、当会が学科を離れて縦の会だけになったら、会員も減り、会費の徴収や後継問題はもっと厳しくなるだろう。それでも頑張ってやったとしても、年齢的にもいつまでやれるのか責任が持てない。私ども、いや私にその能力がないだけかもしれないが、規模ややり方を工夫すれば方

法はあるはずと言っても、縦の会として継続させるということは、誰かが実際の大変な業務を行い、そこで起こること全ての責任を背負っていくのだとご理解いただきたい。

さらに同窓会業務を外部委託できないかということだが、それについては昨年から何度も同窓会専門の委託業者数社にコンタクトを取って、詳細に話を聞いた。それで分かったのは、当会は格納する名簿の人数と情報が多いので業者のホームページに書いてあるような値段では契約できないし、当会に必要な業務を全部委託できる会社も今のところはないようだ。しかも価格が安い委託業者は、紙媒体をカットしてすべてデジタル化しているから安い。つまり会の継続イコール郵送物で来る情報だと認識している会員が多いと、その部分は委託できないので費用と手間は別に相当かかるということだ。

今回、何とかして本会を残す方法はないかと、ありとあらゆるシミュレーションをしてみたが、調べれば調べるほど今の体制のままでは実現は難しいと分かった。

ただ、たとえば昨年高いと批判された現在の名簿管理の委託料については、今使っているＺｏｈｏというＣＲＭは、今年になってから仲介会社を通さず、親会社との直接契約が以前よりずっと簡単にできるようになったようだ。アメリカの資本で作ったインドが本社の会社らしいが、直に契約となると日本語対応サポート付きでも 1～2 万円ほどで歴代の会員 6000 人超の全員の名簿を預けることができるようだ。この会社はＩＴの専門家でなくても誰でも簡単に自由自在にＣＲＭを管理できると謳っているが、実際にはある程度のプログラミングなどの知識が必要のようで、私ども卒業生理事が自在に使うのは相当ハードルが高かった。だが、榎本先生のようなＩＴがご専門の先生や得意分野の先生方なら、もしかすると容易ではないかと思う。学科がそのＣＲＭを使って直接卒業生にボランティアをつのり、講演会などの行事を一緒に行うといった形で卒業生と学科のつながりを残す形にできないかと、先生方に失礼を顧みずに提案したのも、今の体制は一度リセットするけれど、その後で何らかの形でこの学科の会の伝統を次の代に残せないかという気持ちからだ。同窓会代行会社なども、大学が直に卒業生とつながる形を提案しているし、同窓会が活性化している他校のケースを見てもそういう形が多い。そして、もしかしてそこから新たな学縁が生まれ、新たな教育学科の会が生まれる可能性もゼロではないかもと、個人的は思っている。

田部Ｐ　私もこの間、理事の方々の様々な現状をお聞きする中で、教育学科の教員として申し訳ないなという気持ちがある。そして今日の会は、教育学科の卒業生の皆様とのつながりを、これから新たな形に構築するための大事な会だと思ってやっている。理事の方々

は、一丸となって今日のためにご準備くださり、次に向けてのステップだとの思いで今日を迎えた。今回の件では、学科にも色々な事情があるが、学科の教員としては学生を第一に考えざるを得ないので、学生の中が割れる事態になるのは私としては避けたいという思いでいた。

田中ＨＰ　感想、質問を三つほどしたい。一つは、先程パワーポイントで表が出ていた年齢階層別の納入数だが、年齢の為という見方もできるし、時代の推移とともに移ってきたコーホートというか、その世代の特徴が、39～40 回生の間でガクっと変わっているということも考えられる。この時期は教育学科が、人間社会学部全体で目白から生田に移転した時期に当たる。32，3 年前のことだ。心理学科が分かれたので、教員もかなり新しくなった。そこで学科の文化・風土が変わって、縦の会の継続についてマイナスの要因があったのかなという気もしないでもない。いずれにしても、この辺の境をどう考えるか。単純に年齢のせいであれば、先ほどの卒Ｂさんの言うように少し我慢してということもあるが、そうでなくて、時代の問題であったり、学科の体質、風土、文化であったりによるのであったなら、それが学生にも反映するので、今後もむずかしいのかなと思う。

二点目は質問だが、今ある財源を基にして解散をしていくと思うが、余剰分が出た時に考えられるのは、学科に対する寄付だとして、それがインフォーマルに、学科が学科長の名前で領収書を書いて受け取るということができるのか、大学を通さなければならないのか、大学を通すとすると学科が受け取るのは難しくなるのか。寄付のやり取りの方法について、調べているなら教えて頂きたいし、まだであれば確認をしたほうが良いと思った。

三点目は、さきほどから名簿の問題がでていたが、名簿が難しくなったのが事実で、学科長としての当時の責任を感じている。この問題が出てきたときに、専門家の弁護士さんに法制度上の問題は教えていただいた上、当時の総務部長には二度にわたって大学の一部門である教育学科として、個人情報保護に配慮した形での名簿の管理はどうあるべきか質問した。大学としては、縦の会については、すべて認知しないということ。学科の会が、学科の会として独自に何らかの形で法制度上の条件を備えながら、卒業生の名簿の管理をしなければならない。それは短期間にできることではなく、非常に難しかった。ということで最終的に、一番妥当で、制度上も問題にならない、学生にネット上で入力してもらう、という形をとらざるを得なかった。

ただ、たまたま教育学科にこのような問題が出てきただけで他学科も現状は同じ。そういう意味では、教育学科は非常に先進事例。いまの法制度上の現状とそぐわないやりかたで伝統的にやってきた縦の会が、今どの学科も変更を迫られているはず。問題が顕在化していないので、なんとなくやっているというのが現実。だからこれを機会に、桜楓会が法人として、たとえば桜楓会の中の部門として、学科の会、縦の会が入っていくという形を追求し始めるのも一つの方法かなと思う。ただ私自身がなにもできない状態であるし、これ以上やってくれというわけにはいかない。ただ、そういうことを追求する、というやり方もあるかなと思った。

質問としては、寄付の授受について、制度上問題なくできるのか。もしご検討の範囲があれば教えて頂きたい。
櫻井　現時点では調べていない。大学を通すということも、さきほどの齋藤先生のお話で初めて分かった。調べていなかった一つの理由として、学科からここでの審議や採決を経てからでないと、その先については動かないでほしいと要請があったからだ。本日の裁決が出たら調べたいと思う。（清水学科長より「それは学科の方で…」とのお声あり）
また金額についてだが、悲しいことに多分大学の方で問題になるような寄付金の額は残らないと思う。今年は実はまだ会費を徴収できていない。なぜかというと、葦を出せなかったからだ。今年の葦は、改革のその後を含めての報告と今後の展開を皆さんにお示ししなければならないのに、学生会費を含めて重要な事案が学科会でなかなか決まらず、そのまま待機している状態だった。葦の中の納付書を使って会費を支払っていただいていたので、葦が出ないということは会費の徴収ができないことになる。中には銀行振り込みで自主的にお支払いいただいた何人かの方々がいるが、今年度はもう徴収できないので、その方々にはお返ししなくてはならないと思っている。中でも、今年の新卒生の中でお支払いくださった８名の方のことを思うと、その方々のために何もできなかったことが本当に辛い。だから、せめて感謝の気持ちと共にしっかり返金したいと思っている。
また、学生会費も今年の１年生からは徴収しなかったし、他の学年には残りの在籍年の分をお返ししなければならない。そして、葦の最終号も出さなければならない。それには紙や印刷費の高騰もあって、発行部数にもよるが、もしかしたら 80 万円以上 100 万円くらいかかる可能性もある。今残っているお金を、固定経費を含めてそういった形で引いていくと、申し訳ないが最悪 10 万円くらいかもという状況だ。しかもその 10 万円くらいのお金で、できたら名簿やＨＰをこの先１～２年くらいは残していただけたらと、こちらとして勝手な希望も持っている。とにかくそんな訳でお金がないので、今年中に解散しないと学生への返金が難しくなる。それがこの時期の解散提案になった理由でもあるとご理解いただきたい。
田中ＨＰ　了解した。
清水Ｐ　学科長として先ほどの発言から漏れていた部分を補いたい。今年度の年度初めの学科会議において、学科として「教育学科の会の存続については、サポートしていく」ということが決まっていました。そのため、理事の先生方からをうかがいなから、学科でできることは学科で引き受けていくということで検討してきました。そのため『人間研究』に関しては、学科の会より引き上げ、学科教員に編集担当の役割を新しく作り、学科の方で刊行できるよう態勢は整えてきた。また、学生会費についても、減額ということをご相談いただいていたので、以前だったら卒業生理事に来ていただいて学生に対して説明をいただいていたが、一部にある学科の会への不信感が、学生たちに良し悪し関係なく伝わってしまうことを心配し、教員が説明しようということで決まっていた。こうした対応を決めたあたりで、卒業生理事から、この解散提案をいただくことになった。学科長として

は、学科長在職期間に会が閉じられることになることの責任は大きく、踏み止まっていただくことはできないかと、理事の先生方におたずねしたが、田部会長より卒業生理事達の意志が固くて、気持ちを変えることは難しいのではないかというお話を頂いた。とはいえ、伝統ある大事な会であるので、学科としては、総会において「解散」が決まるまでは、何かを決めるというのはよろしくないのではないということで、教員の総意として、総会で「解散」の採決がなされるまでは何も動かないということで、本日を迎えることになっている。

なお、教育学科の会に解散の動きがあることは、学部長には相談済みである。学部長からも、いわゆる縦の会は、いずれの団体も任意団体の扱いなので、大学執行部は一切関知しないということで回答をもらっている。この点の情報は、学科教員も共有している。

本日「解散」が決まれば、今日の総会でお話しされたことやお気持ちを受け止めて、教育学科として今度どのように卒業生とつながっていくのか、学科で検討していきたいと考えている。

田部Ｐ　苦渋の選択だが、採決をしたい。

萩野　採決する前にひとこと。皆様、教育学科の会のためにありがとうございました。皆様がご努力しているのはよくわかった。

採決で解散という結論になった場合のことだが、私は教育学科の会の回生委員会の委員長を昨年までやらせていただいた。それで、回生委員のみなさんに大変お世話になった。回生委員の皆さんは、このことについては総会のお知らせ以前はほとんどご存じなくて、回生委員会がなくなるかもしれない、ということについてもあまりご存じないと思う。しかし、回生委員は回生ごとに決まっていて、その方々はいままで自分たちが自分の回生の窓口として活動しているという自覚を持ってやってくださっていた。その方たちには個別に通知を出さなければならないと思う。また、その方たちには、回生ごとの名簿を教育学科の会からお渡ししている。また古い回生の方は、回生委員会からお渡しした名簿とは別に、それぞれの回生ごとに、クラス会用にすでに名簿をお持ちだ。その名簿をどうするか決めていただければと思う。回収するのか、各自で廃棄していただくのか、廃棄できない方は送っていただくとか、その辺について、回生委員のみなさまへのフォローをぜひお願いしたい。

それとは別に、私が回生委員長として、卒業生の名簿を回生ごとに持っているが、できれば学校の方にお持ちして処理していただきたい。その辺を今後、ご相談させていただきたい。

宇野　質問というか確認だ。「人間研究」は今後どうなるか。教育学科の会が解散したら「人間研究」も終わりになるのか。

清水Ｐ　学科長の方から回答する。今回の決定如何に関わらず、教育学科の方で、「人間研究」は存続させていただく。

宇野　発行が、「教育学科の会」ということで発行していると思うが、今後は「教育学科」ということで発行していくのか。教育学科の会がないのに、教育学科の会という名称で発行していくのはおかしい。
清水Ｐ　それに関しても今日の決議を持って検討させていただきたい。
芳野　15 回生の芳野だ。今までのお話を伺って、教育学科の会が成り立つ頃から関わっていたので、どうやってこの会が起こったかを皆様にお知らせしておきたいと思った。まず、教育学科は文学部教育学科だったが、文学部の中で一番新しい学科として誕生した。最初は存在感が薄く、何とか盛り立てたいということがあり、それで学科の先生方と一緒になって教育学科の会をつくることなった。そして、学科、学生、卒業生、三者一体の教育学科の会が始まった。その後、学生さんたちの研究に役に立つものとして必要ということで、人間研究を出版することになった。葦も学科の中でのコミュニケーションをとるツールとして新聞を出そうということになり、私の先輩が「葦」という名前を付けて、字もお父様に書いていただいて新聞ができた。そんな経緯があり、教育学科の会というのが、最初は縦の会として、それから教育学会となり、教育学科の会に変換した。さきほど先生からお話があったが、教育学科が人間社会学部の教育学科として生田に移る前までは、教育学科の中に心理学の専攻と教育学の専攻と文化の専攻との 3 つの柱があり、それをなんとか統一して教育学科として成り立たせようとしていた。それが人間社会学部になった時に、心理学科と分かれたりして教育学科単独になった。そこでちょっと卒業生の意識が変わったのかもしれない。宇野さんから人間研究についてご質問があったが、私も先輩から人間研究だけは続けてほしいという意見を承って今日ここに参加した。
先程のお話から、色々おありになって、どんなにか理事の方たちがご苦労されたかと思った。会費の問題があるということだが、設立から 70 年もたてば、会員の数が莫大になっているということもあり、会の運営が難しいということもよく分かる。この会の存続について、皆様がいろいろ検討して提案してくださったことについて敬意を表して、よろしくお願いしますという気持ちだ。

５．採決

田部Ｐ　採決に移らせていただきます。
今回の臨時総会で提案された「教育学科の会の解散提案」について、賛成の方は拍手をお願いいたします。
zoom 参加の方は、カメラをオン、もしくはリアクションで拍手をお願いします。
（拍手）
田部Ｐ　ありがとうございました。
それでは、賛成多数で可決とさせていただきます。どうもありがとうございました。
櫻井　ありがとうございました。

６．連絡事項

藤田Ｐ　学科長からこの結果に関連してのご挨拶がある。

清水Ｐ　卒業生の皆さん、本日はお疲れさまでした。この提案が出た時から、どうしたものかと、いろいろ思い悩んできました。70 年という長い期間続けてきたものが、こういう形にならざるを得なかったことを学科の教員として、また当期の学科長として、重たく受け止めながら今日を迎えています。

今日の「解散」の決定を受けて、教育学科の会としては閉じていくという方向で処理をされていくと思いますが、とはいえ卒業生はおりますので、どうやって卒業生をつないでいくか、学科とのつながりをどうつくっていくのか、どういう組織をつくって、どういう形をとっていくのか。名簿の問題、会費の問題等々、問題は多くある思うが、今日ここで出された思いを引き受けながら進めていきたいと考えている。

ここで、ご提案として、3 月 31 日をもっての解散となる教育学科の会について、3 月にまとめの会を開催させていただきたい。教育学科の会で開催ではなく、教育学科として設定させていただき、多くの卒業生に来ていただいて、この 70 年間の会のまとめをさせていただけたらと思っている。内々で相談したところだと、3 月 23 日の土曜日あたりが、20 日が卒業式、そしてその後 1 週間で新入生を迎えていことになるので、そこを提案させていただきたい。

本当に、当初学科長を引き受けた時に、教育学科の会の存続をサポートするということを学科で決めたので、そのような形で着地できなかったことを大変申し訳なく思いますが、そのような気持ちで引き継がせていただきたい。

７．懇談

藤田Ｐ　ここからは懇談の時間だが、皆さん色々な思いがおありだと思う。その思いを伝えておこうという方がいらっしゃれば是非。また先程の採決を受けてのお考えなどもあれば。

浦野　せっかくなので。長い間理事を務めてくださった方もいますので…。

北島　元理事。23 回生で 73 歳になった。幕を引く、というのはエネルギーもいる。本当に今までありがとうございました。

卒Ｃ　18 回生。私どもの回生は一度も回生委員を途切れさせることなく選出していた。何年かに一回はクラス会をやっていて、18 回生の会も盛況だ。戦中戦後で子どもの数も少なく、まとまりがある学年だ。卒業 55 周年パーティも予定されている。皆さんのご苦労もよくわかる。本当にご苦労さまでした。

卒Ｄ　40 回生。今年度は現代女性教育論を担当する、教育学科の非常勤講師をしている。お声がかかればいろんな科目を担当している。地元で NPO の仕事を引き受けている。そちらも同じような状態で、残念だがどうしようもないのもよく分かる。欠席でハガキを出したが、飛び入りで参加した。今後、何かお役に立つことがあればと思う。

藤田Ｐ　オンラインで参加の方も。まだご発言のない方もいかがか。前副会長の大森さんもご参加のはずだが。

大森　今日は本当に皆さん、ここまで準備していただいてありがとうございました。今までの歴史を振り返ると、先生方、先輩の方々、それから学生の方も、ご一緒に何かやってきたという記憶がずいぶんある。先生方のご協力のもとに、ホームカミングデー、色々な講演会、催しもやってきた。思い出を挙げていけばきりがないくらいだ。今はお世話になったことに対する感謝の念が大きい。そして、この会を改革しようと思って努力してくださった現在のＯＧ理事の方々、クローズするまでのご苦労を考えると頭が下がる思いだ。ずいぶん長く理事を務めた。ひょっとしたら 20 年にもなるかもしれない。ずっと改革をと思いながら、そのまま後任の方に渡してしまったので申し訳なく思っている。力が及ばなかった。本当によろしくお願いしますという気持ちだ。先生方にも、ＯＧの方にも、学生の皆さんにもお世話になり、ありがとうございました。

卒Ｅ　36 回生。初めて参加させていただいた。今まで実態を正しく把握していなかった。皆様の誠実なお取組みが、本当に伝わってきた。さきほど卒Ｂさんがおっしゃっていたように、もったいないなとの思いがある。次の機会に、何を目的に、どんな活動ができるのか、新しい時代に合わせて何ができるのか、私もそこに参画させていただければと思っている。今日はありがとうございました。

松尾　杉山さんと同じくらい長く理事を続けて来た。手書きや手作業で色々なことをやっていた古い時代も経験している。ハッキリ言って大変だった。はがきの整理も手作業で、部屋中広げてやるような形だった。仕事もそれだけではなく多岐にわたっていたので、ずっと大変な思いをしてきた。何度交代をお願いしても後任は見つからず、後任がいないのだから、そのままやらなくちゃいけないのだという思いでやってきた。ただこういう風に 70 年も続いた会を閉じなければならないのは、大変心苦しい。皆様に大変申し訳ないという想いでいっぱいだが、ここで閉めるしかないという結論で、今日ここに出席させていただいている。いままで、色々な方々に関わらせていただいた。お礼を申し上げたい。ありがとうございました。

荻野　50 回生。この 4 月から理事会ボランティアという形で顔を出すようになり、こんな大変なことをされていたんだと、先輩方が何十年にもわたり続けてこられたことをはじめて知ることができた。どのような組織でもそうだが、表には見えない、裏の苦労を改めて感じることができた。短い時間だが、先輩方のお手伝いをしながら、70 年の歴史というのはすごいモノなのだと感じ、それを閉じていくというのはとても残念なことだと思う。けれども、そこに関わることができるのは私に課せられたご縁なのかなと思って参加している。また、画面でご参加されている田中先生は、私が 2 年か 3 年の時に生田にいらっしゃったのでとても懐かしい。その節は、ありがとうございました。

田中ＨＰ　ありがとうございました。よく気づかず。ありがとうございました。

清永　今年の４月からかかわらせていただいている。知れば知るほど、とても魅力的な先輩がたくさんいらっしゃって、皆さんとお知り合になれたことが宝。この会は、わたしにとって貴重な、素晴らしい時間を頂いているので、何らかの形で続けていくことは心から賛成だ。今の学生さんにもその魅力を知っていただきたい。きっと、卒業してから、この会が心の支えになることがあると思う。そのために何かできればと思っている。

８．閉会の辞

藤田Ｐ　この辺りで閉めさせていただく。
3 月に、将来に向けた具体的なことを私たち教員からご提案できるようにしたいと思うが、卒業生の皆さんのご支援が必要になると思うので、よろしくお願いいたします。
それでは、日本女子大学教育学科の会臨時総会を閉会させていただく。

議事録作成　清永奈穂　荻野美穂子
編集・文責　櫻井慶子